

飛鳥・奈良と「汎ユーラシアのイラン文化」

青木健

22 「陸のイラン」と「海のイラン」

22-1. 長安から福建省へ

一顧して長望すれば本連載も既に7年に亙り、全18回を数えるに至った。2015年以来、『ユーロナラシア』に執筆の場を与えて頂き、シルクロードを西から東へ辿るべく、「イラン↓ソグディアナ↓ホラズム↓キルギス・セミレチエ↓ウルムチ・トウルファン↓長安」と調査記録を書き連ねてきた。その足跡、概ね下記の如しである。

- 第1号：「飛鳥・奈良に流入した汎ユーラシア文化」、2015年
- 第2号：「ペルシア系とソグド系の2つのイラン文化の中心」、2015年
- 第3号：「ペルシア州ペルセポリス以北に見る石造遺跡群」、2016年
- 第4号：「ペルシアに於ける石造遺跡の概観」、2016年
- 第5号：「ソグディアナのゾロアスター教遺跡の概観（前篇）」、2016年
- 第6号：「ソグディアナのゾロアスター教遺跡の概観（中篇）」、2016年

- 第7号：「ソグディアナのゾロアスター教遺跡の概観（後篇）」、2017年
- 第8号：「ホラズム探訪くザラスシュトラ・スピターマの故地を巡って」（前篇）」、2017年
- 第9号：「ホラズム探訪く古代ホラズムの占星術・天文学とゾロアスター教」（後篇）」、2017年
- 第10号：休載
- 第11号：休載
- 第12号：休載
- 第13号：休載

- 第14号：「キルギス・セミレチエ（七河地方）におけるゾロアスター教・マニ教遺跡（前篇）」、2019年
- 第15号：「キルギス・セミレチエ（七河地方）におけるゾロアスター教・マニ教遺跡（後篇）」、2020年
- 第16号：「中国新疆ウイグル自治区に於けるゾロアスター教・マニ教遺跡

（ウルムチ篇）、2020年

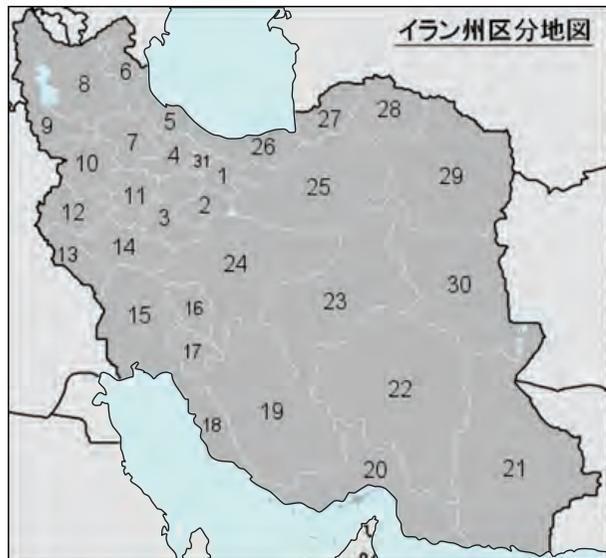
- 第17号：「イラン系民族と漢民族のコミュニケーション比較論」、2021年
- 第18号：「中国新疆ウイグル自治区に於けるゾロアスター教・マニ教遺跡（トウルファン篇）」、2021年
- 第19号：「イラン文化と敦煌」、2021年
- 第20号：「国際シンポジウム『ペルセポリスから敦煌へ』」、2022年
- 第21号：「長安（西安）・その1」、2022年
- 第22号：「長安（西安）・その2」、2022年

読者諸賢は、イランから長安まで辿り着いた以上、ここから一直線に奈良を目指すと思われるかも知れない。しかし、筆者の計画では、次の舞台は福建省である。筆者の主観に於いては、中国に於けるイラン文化を論じる場合、中国摩尼教は明教は避けて通れない。そして、中国摩尼教の主たる活動地が福建省なのである。

而して、連載第1回から第18回までは、本稿の主題が陸のシルクロードたることを暗黙の前提として論を進めてきた。しかし、第19回では一旦基本であるイランに立ち返り、海のシルクロードの出発点から説き起こして福建省に繋げたい。即ち、本稿の主題は、「陸のイラン」と「海のイラン」の対比である。

中国が華北と江南で全く気候風土や文化が違うことは、日本では良く知られた事実である。これと同様に、イランでも、北と南では随分と気候風土や文化が異なる。筆者は、2022年9月に、一週間の内に北方の東アゼルバイジャン州と西アゼルバイジャン州（下記の地図の8と9）、及び南方の

ペルシア州とブーシェフル州（下記の地図の18と19）を調査した。これだけ近接した日程の中でイランの南北を巡ることで、年次や季節に影響されることなく、リアルタイムでのイラン南北を比較できたのではないかと考えている。以下は、その際の印象と記録である。



- 1. テヘラン州
- 2. ゴム州
- 3. マルキャズイー州
- 4. ガズヴィーン州
- 5. ギーラーン州
- 6. アルダビール州
- 7. ザンジャーン州
- 8. 東アゼルバイジャン州
- 9. 西アゼルバイジャン州
- 10. コルデスターン州
- 11. ハマダーン州
- 12. ケルマーンシャー州
- 13. イーラム州
- 14. ロレスターン州
- 15. フェースターン州
- 16. チャハール＝マハール・バフティヤール州
- 17. コフギール＝イェ・ブーイェル＝アフマド州
- 18. フーシェフル州
- 19. ファールス州
- 20. ホルモズガン州
- 21. スイスターン・バルーチェスターン州
- 22. ケルマーン州
- 23. ヤズド州
- 24. エスファハーン州
- 25. セムナーン州
- 26. マーザンダラーン州
- 27. ゴレスターン州
- 28. 北ホラーサーン州
- 29. ラザヴィー・ホラーサーン州
- 30. 南ホラーサーン州
- 31. アルボルズ州

提供：旅行のとも ZenTech (travel-zentech.jp)

タブリーズ…イラン領内の北西に位置する東西アゼルバイジャン州は、歴史的に見れば、イル・ハン朝(1258年〜1353年)、黒羊朝(1375年〜1468年)、白羊朝(1378年〜1508年)、初期のサファヴィー朝(1501年〜1736年)といったトルコ・モンゴル系の遊牧民王朝が本拠を構えた土地である。この両州では、現在でも印欧系のペルシア語のほか、トルコ系のアーザリ語が話されており、この土地が如何にトルコ系遊牧民の王庭として好まれていたかを示している。この地方の伝統的な中心都市タブリーズ(人口150万人強)は、しばしばトルコ・モンゴル系遊牧民王朝の首都として機能し、アルゲ・タブリーズやマスジェド・キャブードなど、その当時の遺跡は市中に多い。

筆者は、今回、このタブリーズを拠点にして、アーザル・シャフル、マラーゲ、ジョルファ、アルメニア正教の聖ステファノ修道院、聖タダイ教会などを訪れる機会を得た。東西アゼルバイジャン州の幹線道路では、トルコ、アゼルバイジャンなどからひっきりなしにトラックが往来し、この一帯が西方との交易で栄える貿易地帯であることを示していた。実際、テヘランやシーラーズの街に比べると、タブリーズの街の責任者は万事決断が早く、外貨の両替もスムーズで、商業都市の熱鬧非凡を感じた。

筆者にとつての問題は、ただでさえ上手からぬ筆者のペルシア語が、テヘランに比べていよいよ通じ難くなった点だけであった。尤も、それに反比例してアーザリ語が普及しているので、これがトルコ系国家である隣国トルコやアゼルバイジャンとの貿易を活性化する誘引にもなっているのだろう。

東西アゼルバイジャン州…タブリーズから一步郊外に足を踏み出すと、群山突兀崢嶸と岩山が聳え、土漠と高山牧地の間に緑洲都市が出現する地形である。乾燥し、且つテヘランに比べれば冷涼としており、確かにここは農業の適地では無さそうである。その代わり、タブリーズ・バーザールの一番の呼び物がペルシア絨毯だったことに象徴されるように、ここは遊牧民の文化が栄える土地柄である。

国境の町ジョルファからアラス川に沿って西進すると、羊腸の谷と蜿蜒の山脈が織り成す迷宮に迷い込み、平野部の土漠とはまた異なった風景が広がっている。その山麓の中に、国境の彼方アルメニアに起源を持つアルメニア正教会修道院が点在し、アルメニア文字で綴られたアルメニア語だけの世界が現出する。時折、彎彎曲曲の山里面に、単性論派を奉じるアルメニア正教会の鐘が響き渡り、「山中有廟、結廬居之」の風情を醸しだしていた。アルメニア語の賛美歌を聞き、蠟燭の火に輝くアルメニア十字架を見詰めていると、「本当にここはイラン・イスラーム共和国か?」と訝しくなるほどである。かなり局所的な現象ではあるが、ここではイランは歴然たる多民族・多宗教国家であった。

食事文化…イランの旅での難点の一つは食事である。これは、イランの料理文化が不味いと云う話ではなく、日本人とイラン料理の相性が宜しく無いのである。日本人は、味噌・醤油・塩で味付けされ、米(少なくとも穀物)と調和する何物かを「料理」と認識する。これに対してイラン人は、さして調味料にこだわりを見せず、とりあえず羊の肉を炙ったものを料理の基本と捉えているように思える。



写真1 西アゼルバイジャン州の聖タダイ教会

この彼我の認識ギャップは、遊牧民文化栄える東西アゼルバイジャン州に於いて、最も甚だしくなった。筆者は、東西アゼルバイジャン州各地で「この土地の郷土料理は何か?」と尋ねては試したものの、ほぼ羊肉の串刺しばかりが並び、それらの微妙な違いを認識するに至らなかった。イラン人たちの言によれば、肉の部位や焼き方によって細かい相違があるらしいのだが、筆者の方でそれを感知する能力に欠けているのである。

22-3. ペルシア州とブーシェフル州

シーラーズ…人口150万人を擁するシーラーズは、ペルシア州(フアールス州)の州都にして、イラン南西部を代表する大都市である。タブリーズからシーラーズへ約1400キロ(東京〜鹿児島間の距離)を飛ぶと、まずはこの都市の湿度に驚かされる。イランで多湿を感じるとは奇妙な表現だが、あくまで東西アゼルバイジャン州との比較の上である。

そして、この街では外貨の両替からタクシーの予約まで万事が悠長に流れており、タブリーズに比べて、商業都市としての機能は格段に弱そうである。私怨めいた話柄を書いて恐縮だが、筆者はこの街にあるシーラーズ大学でのシンポジウムに招待されてやってきたのだが、直前に先方都合でキャンセルされてしまい、随分と困惑した。これによって、講演の予定どころか宿泊予定のホテルさえ雲散霧消してしまい、危うくシーラーズで宿無しになりかけた。直前キャンセルと云う行為は、少なくともペルシア州では、ありふれた日常なのだとして解せざるをえなかった。

ペルシア州とブーシェフル州 … 仕方が無いので実費でホテルを確保し、「良い機会だ」と前向きに捉えて、ペルシア湾岸を調査することにした。(因みに、アメリカの経済制裁下にあるイランではクレジットカードが使えないので、急な出費は一大事である。) 大急ぎで、シーラーズでタクシーをチャーターし、ザグロス山脈を越えて一気にペルシア湾岸のブーシェフルまで往復する計画を立案した。この間の距離は片道約300キロで、概ね東京〜豊橋間に該当する。

この旅は、幸いにも、シーラーズ・ブーシェフル間の自然環境や植生を具に観察する得難い機会となってくれた。まずシーラーズ郊外に出ると、稲作の痕跡が見られた。しかも、水田地帯を過ぎてからも、細々ながら緑が続いており、東西アゼルバイジャン州のような不生草木の禿山に行き当たることは無かった。シーラーズ大学の教授によると、この地方は年に数回は

降雪があるそうで、意外にもペルシア州は降水量に恵まれているようである。

標高1500メートル級のシーラーズからザグロス山脈を半分ほど降りたところで、カーゼルーンの街(人口10万人)に行き当たった。ここは、サーサン朝ペルシア帝国の第2代皇帝シャーブフル1世(在位240年〜270年)がバイ・シャーブフルの都を造営した故地であるが、ちょうどこの地点からナツメヤシの群生が見られるようになった。なるほど、シャーブフル1世の首都選定の根拠の一つは、稲作地帯とナツメヤシ地帯の高度上の境界線だったのかと納得した。確かシャーブフル1世はこの街を愛好するあまり此処で崩御した筈で、メソポタミア平原の中央でナツメヤシに囲まれた大都市クテスイフォンと、サーサン家発祥の地で稲作地帯であるアルダフシル・ファツロフ(現在のフィールーザーバード)の中間を



写真2 緑豊かな(?)ザグロス山脈

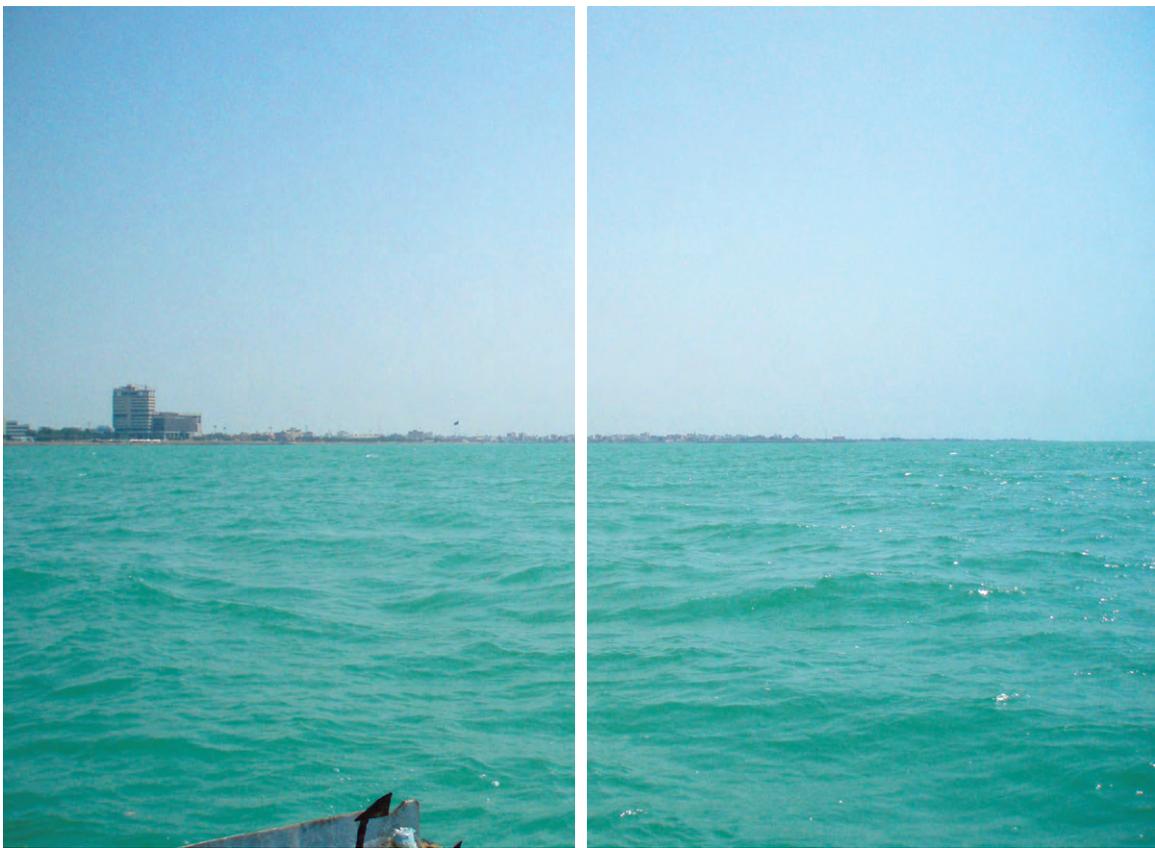


写真3 ペルシア湾上から望むブーシェフルの街

採ってペルシア帝国の京師にしたのだろう。残念ながら、子孫たちはバイ・シャーブフルの街を有効活用しなかったようだ。

カーゼルーンからバラーズジャーンを経て、人口22万人のブーシェフルの港町に到着。ここは、サーサン朝ペルシア帝国の初代皇帝アルダフシル1世が造営したレーウ・アルダフシルの後継都市とされ、当時のサーサン朝海軍の基地を兼ねたとも考えられている。このサーサン朝海軍は、アルダフシル1世以降にどうなったのか、誰も知らない。因みに、ペルシア湾を見て喜んで車内から飛び出したところ、気温が40度近かった上に尋常で無い湿度で、我々が住む惑星上の気候とは思えなかった。ペルシア湾岸の夏を舐めてはいけない。

ペルシア湾は滄海万里、エメラルド色の波が打ち寄せ、これが月夜の浜辺であればさぞ綺麗だったのだが、残念ながら9月中旬の太陽の下では酷暑が

過ぎた。また、ペルシア湾岸の植生は遠くイラク南部と同じナツメヤシかと感慨に耽り、メソポタミア文明のさまざまな夢に近付いた心地がしたもの、5分もすると余りの暑さに体中の水分が蒸発する勢いで、ナツメヤシの植林がパイナップル林に見える幻覚に襲われた。理想と現実とは、斯くの如くにして乖離する。

それでも波打ち際に佇んでいると、漁師らしき人がモーターボートで近寄ってきて、「この船に乗って見ないか?」と声を掛けてきた。筆者は、いまだ嘗てペルシア語で「船に乗れ」と言われたことは無い。「タクシーに乗れ」と言われたことなら幾らでもあるが、また、ブーシェフルまで来た以上、ペルシア湾を洋上から実体験して、今後の「海のシルクロード研究」に役立てたいと思い、「ちよっとそこまで」と答えて乗船してしまった。

すると、このモーターボート、如何なる高馬力のエンジンを積んでいる

のか知らないが、洋上を飛び跳ねるが如く航行を始め、沖合いのタンカーめがけて一直線に轟進していく。おまけに乗船してから気が付いたのだが、このボートはライフジャケットや浮き輪などの装備を一切省略している。と云うことは、ここでモーターボートから振り落とされたら、筆者はあえなくペルシア湾の藻屑と消える公算が高いわけで、必死でボートにしがみつかざるを得なかった。しかし、姿勢を低くしてボートに齧り付いていたお陰で、ペルシア湾の潮水を散々頭から破り、確かにペルシア湾を「実体験」することは出来た。因みに、時々こわごわ重心を高くして陸地を見たのだが、洋上から望むイラン高原は、湿気が多いのでどうしても霞んで見えてしまい、幻影の中に煙っているようだった。少なくとも、稜線のくっきりとした東西アゼルバイジャン州の山々とは全く異質の光景である。

食事文化 … 30分のペルシア湾航海を終え、何とか生きてブーシェフルの街に帰還した後は、ブーシェフル州の郷土料理を求めてレストランに入った。そして、そのメニュー表に「メイグー」なる単語を見つけ、驚嘆した。筆者は、1990年代に東京外大ペルシア語学科の講義に潜りて参加して現代ペルシア語を学んだのだが、その際に「メイグー＝海老」と云う単語を習った記憶がある。あの頃は、「こんな単語、イランでは絶対に使わないだろう。そもそもイランに海老がいるのか？」と訝しく思っていたのだが、四半世紀を経て「メイグー」に遭遇したのである。こんなところで出会った以上、盲亀の浮木、優曇華の花、此処で逢うたが100年目、この「メイグー・スープ」を注文しないわけにはいかないだろう。

而して、出現したメイグーは、5〜6尾がスープの中に浮いていた。ほぼトルコ・モンゴル系の遊牧民王朝が幕営を構えた土地であり、後者はハカーマニシュ朝（紀元前550年〜紀元前330年）やサーサーン朝（224年〜651年）といった定住民系のペルシア帝国の発祥の地である。文化史的に見れば、前者はパルティア期にミトラ教が栄えたといわれ、後者はサーサーン朝期にゾロアスター教神官団の本拠地になった。イスラーム期に入ると、前者は過激シーア派教団の淵藪となり（これには政治史的な要素が絡んでいるが）、後者はペルシア神秘主義文学の中心になった。このように、一概にイラン高原（イラン・イスラーム共和国に限定せずアフガニスタンなどを含む）と言っても、日本列島の約10倍の面積を有するだけに、その上で展開される文化は多様であり、特に南北で好対照をなす。それは、

北のイラン＝陸のイラン … 遊牧的でトルコ・モンゴルの影響を受けたイラン
南のイラン＝海のイラン … 農業的・海洋的でメソポタミアやインドの影響を受けたイラン

と纏められるかも知れない。そして、「陸のシルクロード」に注目する場合には前者に焦点が当たりますが、「海のシルクロード」を論じる場合は後者に重点を置かなくてはならない。

ゾロアスター教は、少なくともサーサーン朝時代以降、ペルシア州を中心に栄えた。現存するチャハール・ターク拝火神殿の教を基準にすれば、ゾロアスター教は、イラン高原の中でも大幅に南に偏った分布をしている。また、

確実に、ペルシア湾で獲れた海老である。筆者は、熱中症の恐れが無きにしても非ずだったので、まずは液体を摂取しようと思いい、このスープを大量に口に含んでから驚愕した。何たることか、調味料に縁が無いはずのイラン料理のくせに、激辛スパイスだったのである。これは、まごうかたなきカレーライスの係累である。海老カレーの親戚と表現しても可である。何故、この海老スープに米が添えられているのか、筆者はこの辛さによって了解した。両者を混ぜて食べるのが、この地方のスタンダードなのである。これがブーシェフルの郷土料理だとしたら、この地域は料理文化圏としては、イランよりもインドに属していると考えて差し支えないと思われた。

また、ブーシェフルから夕闇迫るザグロス山脈を越えてシーラーズに帰還後、この街でも郷土料理を試す機会があった。ウェイターに勧められるままに「ギヤラン・ポロウ」なる料理をオーダーすると、これは要するに、肉団子とキャベツをふんだんに入れた炊き込みご飯であって、米食を主体とする地域で無い限り、まずありえない郷土料理であった。僅か3日前まで滞在していた東西アゼルバイジャン州では羊肉のキャバールばかりだったのに比べて、ペルシア州とブーシェフル州では海産物や米食が郷土料理の主体を為しているのである。

22-4. 「南のイラン＝海のイラン」とゾロアスター教・マニ教

このように、筆者の経験と云うプリズムを通して見ると、イラン北西部と南西部ではかなりの文化的ギャップがある。政治史的に見れば、前者はマニ教の教祖マーニー（216年〜277年）は、メソポタミア南部のバビロン近郊で生まれ、ペルシア湾から船出してインドに学び、最後はブーゼスターン州のグンデー・シャープフルで落命した。こちらも、主たる活動範囲はペルシア湾近傍といえそうである。今後は、この2つの宗教を、「南のイラン＝海のイラン」と云う視点から捉えなおす必要があるのではないだろうか。

（以下、次号）



あおき・たけし
1972(昭和47)年生まれ。東京大学文学部イスラム学科卒業後、同大学大学院人文社会系研究科アジア文化専攻博士課程修了、博士(文学)。現在、静岡文化芸術大学・文化芸術研究センター教授。『ゾロアスター教』(講談社選書メチエ)、『アーリア人』(講談社選書メチエ)、『マニ教』(講談社選書メチエ)、『古代オリエントの宗教』(講談社現代新書)、『新ゾロアスター教史』(刀水書房)、『ペルシア帝国』(講談社現代新書)など著書多数。